

「ほんなん しています。」

わだいのこじん

— 117 —

集落会議

「他人のカネでやろうとするのは愚の骨頂や」とひとり声が上げました。地区のほ場整備事業のための農家集会の場。推進役が反論しました。「農地は荒れ後継者もいない。子や孫の時代まで農地を守るために今がチャンスなんや」。

多くの農村では耕作放棄地の拡大、高齢化、担い手不足のために将来の姿が見えなくなっています。そのため、小さく分散している地区の農地をまとめ、農道や用排水路を整備し、効率的な広い

農地に作り替え、大規模農業が可能な担い手に委ねることで農業の維持を図ろうという計画です。担い手は公の機関が仲介し、外部の農業者をマッチングするしくみ。また国などから集約化率に準じた事業費の支援が受けられるため、今が「チャンス」というのです。しかし、先祖代々の農地の場所移動や他人に営農を任せることが生じるため、農家は大きな決断を迫られています。

反対派に対し推進派が叫びました。「このまま農地が山になってしまってもええんか」

農の心



水源の池について学ぶ

「山になったらええ。このような谷間で段差のある土地で、なぜ無理にほ場整備をするのか。奈良時代から田んぼを作ってきた。条件不利地域でもそれを活かした方法はあるはず。山になったらまた、鍬をもって百姓するんや。パイプで引いた水ではなく、太陽に当たった水で細々と百姓するのがほんまや」。

「百姓ではやれても「業」と考えると採算に合わない。米の値段は上がらなくてもコスト削減すればやれる。ドローンで種を蒔く時代になってるんや」。

百姓とは、風土に根ざした智慧と技術を持ち、それを多様に活用しながら生産と生活を営んできた人、と解釈することができません。お百姓としてのあり方は、農村の再生では見直したい方法論でもあります。百姓志願の若者も目立っています

が、耕作放棄地の拡大速度に間に合わないのが現状です。農地が山になってしまふのは比喩ではなく現実問題なのです。百姓か、新しい農業への大転換か。しかし、両者の根本は「農地を守り米作りをやっていく」

という点では一致しているのです。今の状況を招いてしまったことへのじくじたる思いはあるにせよ、農の気骨は健在でした。

よそのものに託す

地元の間ではない担い手に任すことの不安と不信を訴える人もいました。

「何町でもやったらかといふ人は腹くくって来てくれるんや」。彼らに地区の農業を託そう、そのために「ほ場整備を皆でやろうよ、地区を守るためや」。

言葉は叫びに近くなっていました。「僕は一人で3町の田で作っているがまだ田が足りない」。そう言ったのは担い手に手を挙げていた若い男性でした。自分で農業を始め、工夫した栽培方法と販売ルート、仲間と共同で機械を持つなどのしくみで、彼の米は売れ、海外輸出の話も来ているとのこと。

さらに彼は言いました。「ここは良いところだ、ここに引越したい」。水害で田が流されても米で生きていくんや、と父や祖父の時代がトロッコで土を入れ再生し、池から水路を引き、転作といわれれば果樹にも挑戦し、リアカーが通る農道も皆で作った。そんな地域の歴史の重みと資産の貴重さを彼は農業者の勘で悟ったのです。

地区の千数百年の思いを引き受ける覚悟を決めた若者。バトンを渡そうとしている地域にとっても、全く新しい未来へと転換をする覚悟の選択なのです。



測量

湯崎真梨子（ゆざき まりこ）

和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授

専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。



プロ
フィル